
「彼のプライド 彼女の戦い」

どり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「彼のプライド 彼女の戦い」

【Nコード】

N4244V

【作者名】

どり

【あらすじ】

主人公 酒田めぐみ（さかた めぐみ）。高校2年生。

サッカーが大好きなめぐみは、選手権大会の優勝を目指していますが、決勝戦直前に気持ち^{きもち}が整理できません。そのために、少年団時代のコーチ、木田^{きた}美野里^{みのり}の所へ相談にきました。

イライラする気持ちの原因、それは…

（前書き）

くなでしこジャパンのワールドカップ優勝に寄せてく

これにつきます。

誰か、書くかなあと期待していましたが、なかなか出てこないようなので、書いてみました。なにはともあれ、ワールドカップ優勝、おめでとうございます。

フェンスの向こうは緑の芝が広がっている。
サッカーボールが跳ねると、子供たちの歓声が響く。

「こんな所にいていいの？もうすぐ、県大会の決勝じゃなくて？」
「ええ、でも今日は話を聞いて欲しくて」
コーチの美野里の問いにめぐみは答えた。

弾むボールを一生懸命に抱え込む小さな子達。
遠くでは上級生がゲームに興じている。

（昔と変わらない…でも、違うのは女の子が多いみたい）
グラウンドを見ながら、めぐみはそう思った。

「やっぱりなでしこジャパンの優勝は、女の子達の背中を押したみたいね」

同じ事を思ったのだろう、美野里が言う。

美野里はもう長いこと、このスポーツ少年団でコーチをやっている。
めぐみもここで美野里のもと、サッカーを楽しんでいたのだ。

「あたしの時は、男の子の中にただ一人でしたから」
昔は大きく見えた美野里を、今は見下ろしながらめぐみは微笑んだ。

「その分、がむしゃらでやっていた感じだったわよ。
男の子の中でたっぷり揉まれたというか、鍛えられたというか、ね」
美野里の返事に、めぐみは昔のことを思い出していた。

一番の思い出は4年生の時。

もう既に、めぐみは4年生チームの中心となっていた。1年生の時からボールを触っていためぐみは、ボール扱いも上手で、簡単にボールを奪われないといううまさを持っていた。

4年生の中では上背のあるほうでもあった。

でも、チームの一部や親の陰口には「女の子なのに」というのがあった。

それはもちろん、めぐみの耳にも入っていた。

だからこそ、めぐみは一生懸命にボールを触っていた。

「誰よりも旨い、だからレギュラーなんだ」

そう言われたかったから。

4年生と3年生の試合の日。

本当の試合では学年を越えて試合をすることはない。

だから、ただの練習試合。

でも、めぐみには一つの思いがあった。

3年生の男の子で、めぐみのことを「女のくせに」という奴がいたのだ。

たしかにその子は、めぐみから見ても上手だなという子だった。

いや、だからこそ許せなかった。

今日こそ、女のあたしとどっちがうまいのか、はっきりさせてやる。めぐみはそう思っていた。

試合が始まってしばらくしたとき、二人は接触プレーに遭遇した。左足首の痛みに思わずしゃがみこむめぐみ。審判を見る。

でも、審判の美野里は笛を吹かない。

「それぐらいはよくあること。立ち上がりなさいよ」

そう言いたげな表情。

だけど、それ以上にめぐみの怒りに火を点けたのが、すれ違いざ

まのその子の一言だった。

「女はすぐ、そうやって逃げるから」

…この野郎、思い知らせてやる！

足首の痛みはどつかへいつていた。

追いかける。タッチラインへ追い込む。

上背の差を生かして、ハイボールは競り勝つ。

ドリブル突破を計る相手に、めぐみはスライディングタックルでボールを奪い取った。

芝生の上を転がる相手。

身を起こすと、審判にファウルをアッピールしている。

一瞬、美野里を見るけど、笛は鳴らない。

めぐみはボールを味方に渡すと、その子を見下ろした。

中盤を制した4年生チームは、3年生チームに圧勝した。

たったの1年でも、その差はこの年齢では大きい。

その上に、めぐみが中盤を完全に制したのでは、3年生に勝ち目はなかった。

後半、その子は控えと交代していた。

めぐみに勝てないと感じたらしく、あれからはパスに逃げるプレイになっていた。

今はベンチの後ろで、控えのビブスを着て試合を眺めている。

いや、下を向いて、肩を震わせているのはもしかすると泣いているのかも知れなかった。

試合が終わると、めぐみは美野里に呼ばれた。

「少しは手加減してよね。あの子、つぶれちゃったかも知れないわよ。」

ま、日頃からあんたのこと、いろいろ言ってたのは知ってるから、いい薬にはなったと思うけど」

遠くでやっている3年生チームの反省会を見ながら、美野里は言う。

すっかりしょんぼりした様子で、コーチの話を聞いているあの子が見える。

「なんか、声かけた方がいいですか？」

「止めときなさい。男の子のプライド、もっと傷つけるだけよ。それはコーチに任せておきなさい」

それからはその子はめぐみのことを「女だから」とは言わなくなっていた。

練習でも試合でも、めぐみのプレイをじっと見て、勉強しているようだった。

「天狗だったのが、練習の虫に変わったわよ」

そう美野里は言った。

もともとうまくいったドリブルは一段とキレを増したし、パスの精度もボールのない時の動きもよくなっていた。

そうめぐみが感じたのは6年生になったとき。

6年生に、上手な5年生を加えてチームを作ったとき、当然彼も入ってきた。

めぐみとその子でつくる中盤は、技術、戦術、そして高さでも他のチームに引けを取らないものになっていた。

6年生はスポーツ少年団を卒業する学年でもある。

卒業が近くなったとき、卒団記念として6年生チームと5年生チームの試合が組まれた。

「今日は負けませんか」

試合開始の時、その子はそうめぐみにささやいた。

「こっちが勝つから」

めぐみも返した。

中盤の制しあいは一進一退だった。

試合も引き分け。

すれ違うめぐみに、ちよつと躊躇して、手をさしのべてくる。

「次は勝たせてもらいます」

めぐみはその手を握った。

でも、”次”はなかった。

めぐみが進学した中学校には女子サッカー部はなかった。

迷ったあげく、バレーボールに入部した。

でも、サッカーも続けたい。

そんな希望から、女子サッカー部がある地域クラブに1時間かけて通った。

3年後、めぐみは女子サッカーが出来る高校に入学した。

高校2年生の今、めぐみが所属するチームは県大会の決勝にのぞむところだった。

「で、相談つてのは、なにかしら」

「あの、昨日、セイゴが来たんです」

「セイゴ?... 誠豪くん? 一つ下の、あの誠豪君が、めぐみのところへ？」

美野里は驚きの声を上げた。

二人がつきあっていたなんて、知らなかったわ、そんなニュアンスを含んだ声。

めぐみが慌てて否定する。

「ち、違いますよ。小学校を卒業してから初めて会ったぐらいです」
彼はすっかり変わっていた。

坊主頭は茶色い長髪になっていた。

いや、そもそも身長がめぐみよりも高い。
顔だって、すっかり大人の顔で、ちよっぴり髭もある。
見上げているめぐみには、これがあのセイゴだとは思えなかった。
自分から誠豪だと名乗らなかつたら、誰だかわからなかつたに違いない。

「確かにねえ、あたしも卒業生に久しぶりに会つと、誰だかわからないものね。」

で、セイゴ君はめぐみに何の用だったのかしら？」

めぐみもそれを聞いた。

セイゴはぼそそと決勝進出おめでとうございますと言った。

あ、一応、あたしのこと、気にしてくれたんだ。

それがうれしくて、めぐみはありがとうと返事した。

「でも、その後がショックだったんです。

あいつ、女の子とのつきあい方を教えてくれつて、言ってきたんです！」

セイゴ曰く、女の子とうまくつき合えないらしい。

とにかく、話が續かない。

彼女の話している内容が全然理解できない。

一緒になって何かを楽しむつて雰囲気にならない。

どうしたら、そういうのつて、うまくできるんでしょうか。

あたしが何であんたの恋愛相談受けなきゃなんないのよ。

ちよっぴりムカツときながら、めぐみが聞くと

こついうの、聞ける女の人つて、先輩ぐらいしか思いつかなくて……

その一言でめぐみはカチンときた。

どーせ、あたしは色気のないサッカーバカですよ！めぐみは言い放った。

急に怒り出しためぐみにセイゴはびっくりしていた。

い、いや、先輩、そう言う意味じゃなくて…

うるさいわね、あんただって、サッカーバカじゃない。

同じサッカーバカを、バカにするな！

相手の気持ちがわかんないような奴はふられて当然だよ！

出てけ、このバカ！

「あはは、追い出しちゃったんだ」

「そんなにおかしいですか？コーチ…」

「あ、いや、ごめんね。めぐみの剣幕、想像したらおかしくて、それで終わりなら相談にこないわよね？」

どこか、むしゃくしゃしてしょうがない。

イライラしてサッカーに集中できない。

セイゴのことを考えると、悪い事したなって気持ちと、ムカッて気持ちが出てきて、整理がつかない。

どうしたら、この変な気持ち、整理できてサッカーに集中できるんでしょうか？

「あー、そうね…先に聞いておくけど、めぐみは恋愛経験はあるの？」

「そんなもん、ありませんよ。あたしはサッカーバカですから」

「そう…えっと、うまく言えなかったら、ゴメンね。あたしはただのサッカーのコーチだから。」

シュートできるときにできなかったら、悔いが残るわよね？」

その問いにめぐみは肯く。

「ペナルティキックでもどう蹴るか悩み始めたら、まず負けよね。結果を考えるんじゃないくて、自分がどうしたいのかを先に決める。動く前に結果を考えて悩んじゃったら、何にも出来ないわよね。」

つまり、自分のしたいこと、これを最優先にしたら？結果云々は気にしないで」

美野里の話聞いて、めぐみは考える。

あたしのしたいこと、あたしが今、一番したいと思ってること。
今度の決勝で絶対に勝ちたい。そして、そこにセイゴがいて一緒に喜んでくれたら…

胸の中で、何かがストンと落ち着いたような気がした。

「そっか、そういうことだったんだ…」

「自分の気持ち、わかったみたいね」

美野里は微笑む。

「頑張つて。あたしももちろん、応援に行くわよ。」

卒業生にも声かけるから。

もちろん、誠豪君にも来るように伝えておくわ」

めぐみは頬が熱くなるのを感じた。

でも、それ以上にうれしさがこみ上げてくるのが分かった。

決勝当日。

前半が終わって、1対0。めぐみのチームがリードしている。
相手キーパーのミスでなんでもないゴロがゴールになってしまったのだ。

それでもリードすれば、動きも声も活発になる。

イケイケ状態のチーム同様、めぐみの心もやる気満々だった。

(…このまま勝ったら、応援してくれてるみんなに行つて、そこで…きやつ！)

応援席には美野里も、セイゴもいることはとっくに確認済み。
後はやるしかない。自分の心に正直に、うん、これだ！

後半の半ば。

味方からのパスを受ける。

ドリブルにするか、それとも逆サイドの味方にパスを出すか。

ちらりと遠くを見たとき、めぐみの視界にとんでもないものが飛び込んできた。

(…な、何よ。それ！そんなの、うそ？)

応援席。さっきまで男の子と一緒に応援していたはずのセイゴの隣に女の子が座っている。

女の子のだすちよっかいに、ふざけているのが見える。

「めぐみ、きてる！」

「や、やばっ！」

慌てて反転しようとしたけど、遅かった。

ボールをキープしようとした左足を削るようにして、相手の10番がボールをかつさらっていった。

一瞬、注意を逸らしたツケを払わされたのだ。

相手を必死で追いかけるものの、追いつけない。

味方ディフェンスもかわされて、シュート！

ゴールが決まってしまった。同点。

相手の喜ぶ姿を見ながら、めぐみは渋い顔をした。

(…セイゴがあんなところを見せるから)

ちらりと応援席を見る。隣の女の子と一緒に何か叫んでる。

(…彼女、いるんじゃないの。)

あたしのところへ来たのはいったいなんだったのよ。

ああ、もう、そんなこと考えている場合じゃない。集中、集中！)

追いついた勢いで、俄然相手の方が盛り返してきていた。

相手の攻めに味方が必死で守るようになってきてる。

ちらりと時計を見る。残り時間も少ない。

味方のクリアボールがめぐみの足下に入った。

ターン。相手が寄せてくる前に、開いていた右サイドにふる。右ウイングが上げていく間に、めぐみは前に飛び出していく。

前がかりになつていた相手ディフェンスが必死に戻る。
相手の足をかわしたウイングがファーにセンタリング。
そこにはめぐみが待ちかまえていた。

胸トラップでボールを浮かすと、地面につく前に右足ボレー。

ボールが一瞬、セイゴの顔に見えた。

(…この、バカッ！)

インステップで思いっきり叩きつける。

力を入れすぎでボールは地面に派手にバウンドした。

でも、それが幸いして、前に出てきていたキーパーの頭をワンバウンドで越していく。

そしてバーにコツンと当たると、そのままゴールに入ってしまった。

(やばかったー。あぶねえ…)

自分のゴールを見つめるめぐみのまわりに味方が駆け寄ってくる。
口々にナイスシュート、ゴールって叫んでくる。

「めぐみ、もっと冷静に蹴りなよ、なに、今のシュート」

「ゴールはいいけど、力はいりすぎ」

もちろん、辛口のお祝いコメントもある。

「はは、ごめん、ごめん」

そう言いながら、めぐみの口は重かった。

まもなく、試合は終わりの笛を迎えた。

「やったー！県代表だよ！」

これでもう一つ上の大会に行ける。

念願が叶って嬉しい…はず、なのに。

めぐみの気持ちは晴れない。

じんわりと出てくるのは、嬉しい涙じゃない。

この後で、応援席に行つて、叫ぶはずが、叫ぶはずだったのに…

表彰を受けて、カップと表彰状を受け取る。

そして、チーム仲間は応援席に向かって走っていった。

めぐみはその後から、重い足を動かしていく。

そんなめぐみの前で、美野里が両手を振って、満面の笑顔。

「やったじゃない。すごいゴールだったわねえ」

「全然。力みすぎです。ラッキーだっただけです」

応援席から見下ろしている美野里の表情が曇る。

「どうしたのよ。うれしくないの？」

「だって、だって……」

めぐみの視線を追って、美野里は後ろを振り返る。

そこにははしゃぐ女の子とセイゴの姿があった。

「あ、あは、ははっははっ。ごめん、ごめんね」

急に美野里が笑い出した。

訳が分からずにポカンと見つめるめぐみ。

「あの子、誠豪君の妹さん。」

誠豪君に連絡取ったとき、妹が女子サッカー是非見てみたいって、連れて行くって。

「ごめん。それ、言うこと、忘れてた」

それだけ言うと、美野里は笑い続けている。

めぐみの勘違いがそんなに可笑しかったらしい。

「それにね、めぐみの気持ち、それとなく、伝えておいた。

誠豪君もめぐみのこと、悪くないって言ってたわよ。

あとは二人に任せるから」

笑顔で美野里は言う。

めぐみは頬が一気に熱くなったのに気がついた。

「あ、あの、え、い、妹……さん、え、ええっ!？」

あれは妹さんで、あたしのこと、悪くないってセイゴが言ったって？

さつきからおおはしゃぎで両手で丸を作っているのは、その意味なの？

優勝カップを片手で抱きながら、めぐみは目を擦る。

だめだ、もう、涙腺が全開だ。

今の気持ち、あたしの気持ち、これを正直に言えばいい…んだよね。って、何を言うんだったつけ？

予定していた、あの言葉が出てこない。

頭が、もう真っ白。

涙でにじんだ視界の中、セイゴがいるであろう方向に、めぐみは思いつき叫んだ。

「この、バカヤローツ！！！！」

（後書き）

本編とは関係のないところで、ちょっとした悪戯を考えています。結果が出ましたら、どうかで披露するかも知れません。ですが、なにはともあれ、楽しんで下れば光栄です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4244v/>

「彼のプライド 彼女の戦い」

2011年10月8日18時10分発行